

# 要望書への回答

多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース研究室

2022年2月

以下、2021年3月26日に提出された「メディア芸術コースの今後に関する要望書」へ回答します。

## 要望書の提出と回答について

まず、コースとしての回答が遅れたことをお詫びします。これはコース内で話し合いの場を設けることや、意見をまとめることに時間がかかってしまったためです。しかし、教員同士の話し合いを通じて、要望書で触れられていた問題について共有し、コースをよりよい学びの場にしていくために、積極的に取り組んでいくことで意見が一致しました。以下、要望書で挙げられていた問題について、コースとしての回答と改善に向けた取り組みについて述べます。

### ①6年で教授職を交代するようにし、風とおしをよくしてほしい

まず、6年での専任教員の交代は、既存の大学の制度のなかでは難しい側面があります。個別の教員は授業以外にも研究や大学組織の運営に関わる業務があり、一律での短期間での交代はコースや学科、大学自体の持続性を損ねる可能性があります。また、大学という制度自体の仕組み自体を見直さなければならず、長い時間をかけて検討する問題となります。ただし、風通しをよくするために、メディア芸術コースとして取り組むことが出来ることはあるはずです。この後に述べるいくつかの取り組みを通じて、問題を少しでも改善へと繋げていければと考えます。

## ②10年以内に、半数の教員を女性やセクシュアルマイノリティのために開いてほしい

教員人事は、いくつかのプロセスを経て大学側が最終的な可否を判断する仕組みとなっていて、その結果を完全に約束することは難しいです。ただし、人事案についてはコースとして提案を申請することが可能です。また、実際に現在の教員構成において、ジェンダー構成と年齢構成の多様性が欠如していることは事実であり、この問題について配慮が充分でなかったことを反省し、今後の人事提案においてこれを改善していくための提案を行っていきたいと考えています。

## ③ジェンダーの専門家から授業を受けられる機会を作って欲しい

この問題については、次年度（2022年度）に新たに4枠特別講義枠を申請し、ジェンダー論に関するゲスト講義を4回行うことを予定しています。合わせて、講義の後にゲストや教員と学生が、この問題について議論できるような場をつくりたいと思います。また、単年で終わらずに継続して実施していきたいと考えています。

## ④ラボを横断したディスカッションの機会を設けてほしい

コロナ禍の影響で、以前よりもそうした横断的なディスカッションの機会が失われてしまった部分があったかと思います。まずは、すでにあるPBLや技法工作演習といった横断型の授業や、現状でも他ラボの教員に相談可能であることを周知していきたいと思います。また、これについて非常勤の先生からも演習授業でのラボを横断して教員が参加する講評会の実施や、専任・非常勤講師が授業の講評会や展示の告知を共有することが可能な仕組みの提案がありました。こうした横断的なコミュニケーションが取れる機会を増やし、開かれた学びの場を生み出していけるように取り組んでいきたいと思います。

## おわりに

今後、メディア芸術コースは学びの場における多様性、ジェンダーに関する授業の機会、横断的なコミュニケーションの実現といった、より良い学びの場を作り出すための問題に取り組んでいきます。また、これは常に現状を確認し最適な状態を目指して、流動的に変化しつづけていくものでもあると思います。教員だけでなく、研究室の助手・副手さん、在校生・

卒業生のみなさんとともに意見をかわしながら学科やコースをよりよい場所にしていくことを今後とも継続していきたいと思ひます。